



高齢者の笑顔が見たくて…

会員

松石 献治<17期>

自宅で高齢者のデイサービスを始めるなんて、昔の私だったら考えもしなかつただろう。1998（平成10）年にそれを始めたのは、家内の父の影響と言ってよい。父は開業医だったが、晩年認知症になった。症状が徐々に悪化して下の世話が必要になった頃、我が家に引き取って一緒に生活するようになった。苦あり笑いありの日々だったが、父の死で私たち夫婦は胸にポツカリ穴が開いたような感じだった。その想いが自宅での高齢者デイサービスへつながっていった。

現在、月曜、木曜は「グループデイゆうゆう」の名で健常者から認知症高齢者まで、火曜は「かたつむり」の名で認知症専用のデイとなっている。平均年齢は88.7歳。豊富なアクティビティは誇るに足る特色だ。特に音楽関係は素晴らしい。ボランティアで来てくださるプロのピアニストが一番数が多いが、他にもヴァイオリン、フルート、ハーブ、チター、パンフルート、琴、琵琶等。声楽では、ソプラノ、メゾソプラノ、テノールなど素晴らしい声量で聴かせてくれる。わらべ



「グループデイゆうゆう」7周年記念でスピーチする筆者

唄や習字、手作りアート、創作ゲームなども人気だ。「かたつむり」では、回想法、作業療法、音楽療法も多用している。

ゆったりと楽しい時間が流れている。「ゆうゆうの前日には美容院に行くの」とか、「前日には点滴していただくんですよ」などという話まである。

デイサービスを始めるに当たって、本気で始める以上しっかり勉強しなければと考え、私は社会福祉士の資格を、家内はヘルパーの1級までを取得した。

デイにおける高齢者との日常の関わりがベースとなって、東京弁護士会の高齢者・障害者の権利に関する特別委員会や日本社会福祉士会の権利擁護センターばあとなあ運営委員会へ参加することになる。

両委員会に参加して思いついたのが、弁護士と社会福祉士がそれぞれの専門性を尊重しながら、対等の関係でペアを組んで成年後見活動をするのができたら、それこそ夢のような話ではないかということ。大体、現在の成年後見の運用実績を見ると、第三者後見が少な過ぎるし、施設入所者の後見開始件数があまりにも少ない。

そこで、このたび、弁護士と社会福祉士の有志で、成年後見センターペアサポート（有限責任中間法人）を立ち上げた（両専門職がペアになって高齢者をサポートするという意味で名付けられた）。法人が後見人になり、必ず弁護士と社会福祉士がペアで担当者になって後見活動をするという構想である。

私は今年69歳になる。この年になると、このペアサポートは孫のようなもので、人生に深い味わいを付加してくれる貴重な存在になりそうだ。

高齢者の笑顔こそが何よりのご褒美である。